

## ◇歴史物語のあらすじ

縄文中期、五帝期黄帝につながる東の天帝の児が九州に渡来して、土着の海神大神(天帝子孫)・鰐族らの上に立ち、玉つ宝七つ(死返玉・道返玉・生玉・足玉・葉細の玉・足高の玉・赤石の玉)・熊の神籬などを奉り、地の神を至上とする那珂つ国を那珂川流域(福岡市)に建国した。

黄帝の政を踏襲してきた彼は筑紫島全域を支配するや、仁徳・慈愛を謳いながら東西南北四方に忠臣の四力国を配置し、神仙の国(神国)づくりを励んできた。その四力国は、后土末裔と自負して玄界灘沿いを守る黄泉国(闇見国)、地の神を祀って黄帝一門と称する国東の杵築国、炎帝(神農氏)子孫と語る南の火の国と配下熊族(熊襲)、筑紫平野以西に展開する海神大神だった。

ついで水田稲作の始まる前五世紀前半、呉の太伯(周大王古公亶父の嫡子、姫氏)・呉王夫差ら子孫が九州西北に渡来して、日の鏡・瀛おきつ鏡・辺へつ鏡三面で天(日、太陽)を祀る天あめ之国を興した。両者は天地と称して手を携え、摂津の六甲山南麓、奈良盆地、琵琶湖南岸まで進出した。

前四世紀後半、今度は夏后帝少康庶子・越王句践につながる越のオロチ族が薩摩半島に大挙襲来して那珂つ国に襲いかかり、そこに都して蛇神を崇めるオロチいっ之国王朝を打ち立てた。

敗れた那珂つ国勢は、闇見国・杵築国と共に辺境の出雲に追いやられ、国の名も中つ国と改名させられた。一方の天之国はオロチ族配下に組み込まれ、越流米づくりを強いられてきた。

その後、厳之国王朝は鰐族・山祇族・三嶋族を抱える海神大神と手を組み、瑞宝十種を天璽として奉る厳之国本家の宗像家を共立すると、北陸や東海に繰り出して水田稲作を押し広げたが、それ以东では北の縄文勢と小競り合いを繰り返すばかりで、一步も前進できなかった。

その瑞宝とは、死返玉・道返玉など玉四つ、瀛おきつ鏡・辺へつ鏡、軍団を統率する銅劍八握劍、船団を指揮する蛇の領巾四などだった。この玉四つは那珂つ国から、鏡は天之国から強奪した神宝だ。

秦が天下統一した前三世紀後半、天之国は半島から渡来した韓系日高国と組んでこの王朝を倒し、倭国ヤマト（高天たかま）王朝を共立して東海まで進出したが、北陸で越オロチ族と対峙して阻まれた。この間に、前王朝派の越オロチ勢が火神の炎帝一門を担ぎ、厳（水、火）之国を立ち上げた。この国のかたちこそ、水徳国（瑞徳国）であり、国の目指すところも「水田稲作に勤しむ国」だった。天之国はこれを身内に挙って組み入れたことで、天（厳）之国とも呼ばれた。

その一方で、天（厳）と日高は分家の日隈家ひのくま（熊野家）を共立して、これに倭王である日の神警護や熊本平野以南の統治・開拓を背負わせた上で、これら三家による支配体制に切り替えた。熊本平野に移った日隈は、熊族が祖霊と崇める神宝を取り上げ、日隈神宝として奉ってきた。それは、銅矛・日の鏡・玉三（羽太の玉・足高の玉・赤石の玉）・熊の神籬などで、この中の日の鏡は熊襲が天之国から奪った鏡、玉は那珂つ国から奪った玉、熊の神籬は取り戻した神宝だった。その後、銅鐸で先祖を祀る大倭家を太氏と一緒に共立して、筑紫国東部の国東に策封してきた。この家は出雲に移封された後、倭が河内から奈良盆地に進めた副都の政や軍事を取り仕切る家柄に抜擢された。それ故、奈良盆地は大倭国と呼ばれ、その分家は東海の津々浦々まで広がった。前二世紀前半、漢朝内部で跡目争いが起こり、これに関わった漢の王族らが倭に流れて来た。

時の倭王は、国東に豊なる王家を興すと、在郷の中つ国や海神一門に分散する鰐族・海部家あま家を配下として分け与えた。この経緯から、豊国は高祖にあやかり、亀と火神を尊んできた。

その後の海部家は、丹後や尾張に国替えされた後も、豊系の火神王や鰐族長を担ぎ続けてきた。これら倭三家・豊国・大倭家に君臨する倭王は、日高と天（厳）から交互に選ばれた。両家が倭王を出せない事態に陥ると、豊国または日隈の皇子が本家の養子に入り、倭王に立つとされた。その倭王は政の大事が生じた際は、日高と天（厳）の重臣らを一堂に集めて協議させてきた。そ

の協議の場は、高天の原と呼ばれた。高天の原の高は日高、天は天（厳）や天之国の意である。その当時から、前漢鏡で日の神を祀ってきた祭場では、倭王は祭壇正面の玉座（日前）に、日高王は倭王左の心もち高い座（日高）に、天（厳）王は玉座背後の座に、豊国王は倭王の右に座をとった。日隈王は最後列の片隅に畏って控えてきた。それ故、日隈は日隅とも呼ばれた。

倭国王朝に続き、中細形銅剣で先祖を祀る豊葦原中つ国王朝（豊国、オロチ葦原家、中つ国が共立）、ついで有柄銅剣で先祖を祀る伊都国王朝（吉野ヶ里の厳分家が糸島平野に樹立）が興った。

光武帝劉秀が漢朝を再興した一世紀前半、倭国は豊葦原中つ国と盟約して、天地なる倭奴国王朝を福岡平野西の怡土に樹立すると、北陸から東海、さらに関東・仙台平野にまで領土を広げた。

この立役者天常立は、初代女系天神として怡土に天宮すると、豊葦原中つ国王を婿に迎えて倭奴国王に担ぎ、日高王高皇産靈に王朝守護を命じて十握剣を託した。次に銅矛・日の鏡など日隈神宝をかざす日隈王に天神警護を命じ、自身は天地を具現した方格規矩鏡を天璽として奉ってきた。

五十七年、倭奴国王の使いが漢に朝貢して光武帝に見え、金印「漢委奴国王」を賜った。

その百余年後の一八〇年代、即ち六代女系天神天尾羽張神の御世に、東方が騒然としてきた。

その時、日隈の伊奘諾は天神から東方建て直しを詔されると、伊奘諾太子で東の副都（唐古）を治める豊受皇太神（山王、豊葦原中つ国の所造天下大穴持・大国主、佐太大神、天神尾羽張神の宗女・向津姫の婿養子、熊野権現）らを率い、武力鎮圧に乗り出した。

その最中に、皇太神が三輪氏ら畿内オロチ勢、海神分家の大海神、鰐族、豊葦原中つ国・オロチ佐太国など出雲勢、尾張・丹後の両海部氏と共謀して、オロチ厳之国王朝を再現すると銘打ちながら、水神と火神を尊ぶ瑞穂の厳之国王朝、即ち邪馬台国を立ち上げ、大倭唐古に都した。

伊奘諾は十握剣・瓊矛など日隈神宝をかざしながら、島根半島の闇見国（月夜見国、黄泉国）で

決戦に臨んだが、大敗して向津姫・素戔嗚と共に熊襲に逃げ落ちた。ここに、日隈は没落し、倭奴国王朝も日向高千穂郷の高天系、畿内邪馬台国〔厳之国王朝、天（厳）之国王朝、日本王朝に発展〕に割れた。建国以来、副都を支えてきた大倭国は、高天勢と袂を分かち、敵に回った。

以後、皇太神は大蛇の水天神天照大神と語りながら銅劍天叢雲劍を天璽として持ち歩く一方、蓬菜郷づくり、天竺直伝の仏法流布・常世づくりに入れ込んできた。その児天鹿兎山（天羽羽）も、天鹿兎弓・天羽羽矢を天璽に奉って火天神に立った。この天下の入れ替わりが倭国大乱だ。

一八〇年代末、倭の国名を奪われた向津姫は天之国、高天と語る他なかったが、日神の天照大神に立つや、臣下らが八咫鏡二面（日の像の鏡、日前鏡と真経津鏡、三角縁神獸鏡）を铸造して奉った。彼女は真経津鏡を天璽に奉って高千穂郷に天宮し、倭（奴）国王朝再興に動き始めた。

一方、熊野家再興を急ぐ素戔嗚は、日前鏡、日矛など日隈神宝、布都斯魂の十握劍を日神から賜り、五十猛（天日槍）と共に新羅に出奔した。その後、奥出雲に潜入して十握劍を以て八岐大蛇（天照大神親子）を討ち、二天神の天璽と火天神の児（饒速日と彦火明）を召しとった。

彼はその十握劍・天璽・火天神の遺児二人を日神に送り届けた後、豊葦原中つ国再建に奮闘したが、佐太国に養子に出した実子の大己貴に邪魔され、日前鏡、日矛など日隈神宝を奪われた。

その後は、大己貴が葦原中つ国建て直しに成功して、越（高志）オロチ勢ともども西と北から邪馬台国を執拗に攻め続けた。防戦一方の天照大神は、妻の日神と手を組むのが最善と悟った。

一一〇年代前半、天照大神は妻の日神と語り、この国を統一して南北の外敵を追い払う方策で合意すると、高千穂宮に赴いて布津主とも高皇産靈とも称した夫は、天孫饒速日（火天神の遺児、初代垂仁）に天璽の天羽羽矢と瑞宝を授けて大倭降臨を命じた。だが、彼は一年足らずで逝った。

次に忍穂耳を送ったが、大己貴に妨害された。そこで二神は、武甕槌に布都御魂の十握劍を授けて出雲に送り、戦わずして大己貴に国譲りさせた。その後の大己貴は、日前鏡、日矛など日隈神

宝を差し出して日神と高皇産靈に不義を詫び、天孫天火明（火天神の遺児）の養育に努めた。そこで二神は、日隈家再興を願いつつ、火天神家に移籍した天孫火瓊杵に天叢雲劍・日前鏡など三種の宝物、日矛など日隈神宝、火天神の御子と印す天羽羽矢を授けて吾田降臨を命じた。

その直後、天照大神は大倭に戻って天火明に日高見国を建てさせ、丹後・尾張の統治、さらなる東の領土拡大を命じた。天火明（二代垂仁）は、武蔵・房総・常陸など関東から仙台平野まで短期間に制圧して、千葉県市原市惣社に日高見国を遷し、纏向地区を真似た東都を開くことになる。同じ頃、日神一行も大倭に向かった。その途上で夫が急逝した。彼女は纏向上之宮で女王に立つと、鬼道を操ってオロチを奉る祭祀の上に、八咫鏡で日の神を奉る祭祀を覆いかぶせた天（厳）之国（大倭で蘇る倭国）王朝に模様替えし、素戔嗚に全軍の統括、大己貴に都の治安を委ねた。ついで豪族らに八咫鏡を配り、己の御霊として祀らせた。ここに、天之国の女系天神は途絶えた。一方の火瓊杵は、笠沙に都して女神大山祇神の娘、木花咲耶姫に婿入りし、日前鏡と日矛を奉

ひのくま

ひのまへ

る日隈（日前）家を再興した。数年後、西都市妻に遷都して日隈を日前と改名し、火照（海幸彦）・火スセリ・火折に恵まれた。この国は妻国とも呼ばれたが、「倭人伝」や「記紀」は、投馬国、狗奴国、熊襲としか記さない。日高見国を建てた天火明も、誉津別（火火出見）に恵まれた。

両家の嫡子が成長すると、女王は天孫二人に両家の絆を深めたいとして嫡子の交換を命じた。その結果、火折が大倭に天降って誉津別に成りすまし、火火出見は火瓊杵家に養子入りした。

一三二八年、ヒミコは魏の都に使節を送り、魏帝から金印、鉄刀二・方格規矩鏡百を賜った。同じ頃、海幸彦と火火出見が日前の太子の座を巡って争い始めた。敗れた海幸彦は、命乞いして、「これから先は、夜も昼も火火出見の宮殿を守って仕えるから許してくれ」と命乞いした。

一四〇年代中頃、今度はヒミコと火瓊杵が刃を交え、争い出した。その最中に、天火明が女王の座を奪いにかかったが、失敗して日高見国・尾張勢ともども東都を捨て、常陸に走った。

その後のヒミコは火瓊瓊杵と和睦してその兄・海幸彦に、饒速日と火明の家督、火天神の御子と印す天羽羽矢、天璽だった瑞宝を継がせると確約して上之宮に参内させると、八咫鏡（鏡作神社の御神体）と十握剣二振りを受けて、日本家を興すよう命じた。その直後、倭姫と共に天叢雲剣を奉じて伊勢国五十鈴宮に遷座し、ひたすら夫天照大神が降臨してくるよう祈り続けていた。

二四〇年代末に女王が逝くと、海幸彦は纏向珠城宮で先の鏡剣を神璽に奉つて日本王朝やまとを開いた。二六六年、二代女王トヨの朝貢後、彼はヒミコの墓を天地に見立てた前方後円墳に造り変えようと、泰山に見立てて封禅し、天照国照彦火明饒速日（三代垂仁）と語つて天神に立った。同時に現人神の日本大物主大神（三輪氏最高位）に昇り、倭奴国王朝再現に動いた。

同じ頃、火瓊瓊杵の家督を継いだ火火出見は、日前を和国ヤマトと改名して、日本朝打倒、伊弉諾と日神が切望してきた倭奴国王朝再現、日隈・日前・熊野家の先祖祭祀復興を声高に唱え始めた。

二七〇年代後半、火明饒速日は火火出見に誓つた不名誉な過去を消し去りたい一心から、景行に熊襲（火火出見のこと）征伐を命じた。だが景行は惨敗して、日向に六年間も幽閉された。

二八〇年代前半、仲哀・神功・日本武も天神から熊襲征伐を詔され、橿日宮から撃つて出た。

この直前、火火出見の遺志と和国を継いだ磐余彦は、東征を決断するや、大手柄を立てた勇士を葬送する八咫鏡（三角縁神獸鏡）を大量に携えながら日向から北進し、橿日宮を目指した。結果、仲哀軍が大敗し、神功・日本武らは仲哀を見限つて東征軍に寝返つた。勢いづいた東征軍は安芸・吉備・出雲を征圧して六甲山南麓を征圧すると、河内湖を横切つて日下を攻めたが、惨敗して熊野に迂回した。磐余彦はそこで熊野家祭祀、紀伊でも日前宮の祭祀を晴れて叶えた。

三世紀末、磐余彦率いる本軍、外戚の大山祇神・海神豊玉彦・族、分家の少童三神ら諸軍が大倭磯城になだれ込んで日本軍を破ると、火明饒速日は天璽の天羽羽矢を差し出し、帰順を願い出て

きた。磐余彦は二人が共に火天神の御子と悟ると、帰順を許して第一の重臣に取り立てた。

この間、倭の女王は、豊鍬入姫↓倭迹迹日百襲姫↓気長足姫（神功）↓倭（迹迹）姫と続いた。

三〇一年元旦、磐余彦（神武）は橿原に都して大和朝廷（和国が大倭国と共立した大和家に豊葦原中つ国・日本・厳之国らを併合）を開き、その初代天皇（始馭天下之天皇）に即位すると、大倭王開化の皇子・御間城入彦（崇神、初国知らしし天皇）を太子に指名し、ついで火明饒速日の児可美真手に物部姓と十握剣を授けて、海幸彦がかつて誓約した宮殿と朝廷の守護を厳命した。冬十一月、可美真手は正殿に天璽の瑞宝十種を奉り、帝と妃の鎮魂を崇め鎮めて、長寿を祈った。

三〇四年二月二十三日、神武は鳥見山中に天地を具現した日向型前方後円墳（桜井茶臼山古墳）を造営して郊祭し、皇祖天神（天照大御神と高皇産霊）を天に配し、皇祖皇宗に奉った。

『邪馬台三国志』歴史物語編には、最初に水田稲作を始めた天之国が倭国（高天）王朝、倭奴国王朝、天（厳）之国（倭、邪馬台）王朝、日本朝、和国王朝、大和朝廷の名の下で、何度も蘇ってきた歴史が物語として綴られている。視点を変えると、こんな見方のできる歴史でもあった。

★前五く前四世紀、戦国中国の覇権争いに敗北して、日本列島に逃げ込んだ呉王夫差と越王句踐の子孫は、邪馬台国末期に至るまで延々と覇権争いを繰り返してきた。結果は、戦国中国の歴史とは正反対に、呉の太伯・呉王夫差末裔の天之国が天下を制して、大和朝廷を築き上げた。

★日神が願った倭国・倭奴国王朝の再現や、海幸彦が火火出見に誓った誓約は、火火出見を襲名した磐余彦が大和朝廷の初代天皇即位後に、漸く叶った。即ち海幸彦末裔は、磐余彦から物部姓と十握剣を賜って大和朝廷に仕え、磐余彦火火出見の宮殿を守護する大役を背負わされたのだ。

★高皇産霊による葦原中つ国平定、神功の新羅遠征、日本武尊による日高見の蝦夷討伐は、布都御魂の十握剣、射楯神（日矛）、天叢雲劍（草薙劍）の威光の下で、兵法極意「戦わずして勝つ」を達成した実話だ。この時代、祭器を振りかざし、刃に血塗らずして勝った者が英雄視された。